

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.53

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

フェートン号事件 200 年を迎えて

2008年元旦。一般の人々にはふだんの新年と何ら変わることはない年明けであったろうかと思われませんが、こ
と英学史、英語教育史研究者にとって、この新年は気持ちを新たにすひとつときであったかと思ひます。

鎖国体制が170年にも及び、天下泰平のときが続いていた文化5年、すなわち、西暦で言う1808年、長崎の
街を驚天動地の混乱に陥れる事件がおきました。世に言うフェートン号事件です。オランダ国旗を掲げて長崎港
に侵入、オランダ商館員2名を人質にとって不法な要求を突きつけたイギリス軍艦フェートン号に対し、長崎奉
行はなすすべ無く、やむなくその要求を呑んでようやく人質を取り返すという事件でした。奉行は、その後、事
の顛末を認め、幕府に報告を送ったのち引責自刃して果てることとなりますが、この天下の一大事に、幕府はそ
の原因を分析し、その後の対策を協議して、翌文化6年、長崎の蘭通詞に対して英語習学の命を下します。これ
が日本の英学史始めとなるわけですが、そのきっかけとなったフェートン号事件より数えて今年2008年はちょ
うど200年目の節目に当たります。

日本英学史学会では、日本英語教育史学会との共催で、秋10月に、事件の舞台となった長崎を会場に、フェー
トン号事件200年をテーマとする全国大会を開催することになっております。現在、実行委員会を中心に、日本
英学史学会本部、同九州支部、日本英語教育史学会の関係者によって企画立案が進められておりますが、この記
念すべき大会に、中国・四国支部からもたくさんの方がご参加ください、積極的に研究発表を行ってくださ
いませうお願いを申し上げます。

日本英学史学会中国・四国支部

支部長 竹中龍範

平成19年度第2回(通算57回)研究例会報告



山口研究例会会場での記念撮影(2007年12月8日 山口大学教育学部C棟24番教室にて)

平成19年度第2回(通算57回)研究例会は、平成19年12月8日(土)山口大学教育学部を会場として開催されました(参加者18名)。3名の会員による研究発表が行われ、活発な議論が交わされました。いずれも豊富な資料に基づく研究発表であり、たいへん充実した研究例会となりました。

会の開催にあたり、会員の金田道和先生、理事の上杉進先生には多大なるご尽力を賜りました。会場校の山口大学の於きましては、高橋俊章教授に格別のご配慮を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

研究例会プログラム

日時：平成18年12月8日(土) 12時30分受付
場所：山口大学教育学部 C棟2F 24番教室
〒753-8513 山口市吉田1677-1
TEL: 083-933-5300

開会行事(13:00-13:10)

支部長挨拶 竹中龍範

研究発表(司会 竹中龍範)(13:10-14:10)

能登原昭夫

「岡山英学史から見た岸田吟香」

研究発表(司会 上杉進)(14:20-15:20)

保坂芳男

「岩国英国語学所の生徒たちの進路に関して
教師ステーブンスの影響に焦点をあてて」

研究発表(司会 田村道美)(15:30-16:30)

村端五郎

「Appleはリンゴ(林檎)に非ず 英和辞書
におけるApple訳語の変遷について」

閉会行事(16:30-16:50)

副支部長挨拶 田中正道

写真撮影

例会終了後、会場を湯田温泉街の会場に移して平成19年の忘年会を開催しました。とても和やかな雰囲気の中、支部のこれからを楽しく熱く語り合う場となりました。愉快的集いは、湯田温泉の冬空に高らかに歌声を響かせる二次会まで続きました。

懇親会会場：居酒屋坂田山本店

(湯田温泉6-156-1 TEL.083-932-3610)

研究発表に対する参加者からのご感想を以下に掲載しますのでご参照ください。

<研究発表>

能登原昭夫「岡山英学史から見た岸田吟香」



岸田吟香と英学ということではヘボンとの関係で見るばかりでしたが、地元から見た吟香ということで興味深く伺いました。(Dragon)

岸田吟香はヘボンの「精錡水」によって目が見えるようになったが、同時にヘボンとの交際により新しい文化・世界に目覚めたとの指摘が面白かった。

(Emma)

資料の総合した所に、岸田像のある所をお示しいただき、資料の集め方、資料の読み、人物像、活躍の分野、活躍の内容が、幕末から昭和にかけての日本の動乱期の中で、時代、国境を越えて、先覚的であった事を実証してお見せいただき、間近に学べた事は、この研究会に出た最大収穫でした。御著書を頂き、帰宅してから先生の御足跡をもう一度迎える楽しみも自宅に持って帰って、何か心がわくわくし、元気を得た御講演でした。ありがとうございました。

(年おいて道遠き男)

岸田吟香の人柄と偉業に圧倒されました。ハンドアウトも充実したものであり、未永く保存したく思います。(もみじまんじゅう)

岡山が生んだ逸材、岸田吟香を、このまま埋没させてはいけない、との情熱溢れる御発表であった。写真、年表、新聞記事など、豊富な資料をご用意くださり、平易な語り口と相俟って、よく理解できた。温故創新の気迫が感じられた。(風呂 鞆)

ヘボンの『和英語林集成』の編纂に岸田吟香が深く関わったということを知り感銘を受けました。先生の長年の研究の中で、岸田の業績が再評価されることを望みます。先生の言われるように、岸田吟香は岡山検定の対象に当然なるべきだと思います。

(保坂芳男)

ユーモアと、シニカルな面と、きちょうめんな資料の作成と、和気あいあいの中にも説得力があり、本会の未来にも疑問をなげかけられた。(Duke Ace)

能登原先生には岡山県出身の才人岸田吟香の生涯業績等についてお話をうかがいました。能登原先生のご研究の真骨頂は二次資料に基づきながらも、それを独自の視点や人生経験から深く解釈し直し、独自の人物像を創り出しているところにあるような気がしました。それだけに大変興味深い人物像が出来上がっていました。また、先生の話の余談の中には問題の本質が隠されていて大変勉強になりました。特に研究方法についての問題提起は参考になりました。

< 研究発表 >

保坂芳男「岩国英国語学所の生徒たちの進路に関して 教師ステーベンスの影響に焦点をあてて」



< 発表の概要 > 明治の初期に2年間だけ岩国に開設された岩国英国語学所に関する研究の3回目である。今回は、卒業生の進路を、イギリス人教師ステーベンスの影響という観点から明らかにした。具体的には、英語、教職、キリスト教の3つの視点から、卒業生の進路をまとめ、英国語学所の教育内容の再評価を行った。卒業生の中には、東洋のエジソンと言われ東芝の創始者の1人である藤岡市助や、帝国図書館初代館長田中稲城、中央大学の創立者の一人である渡辺安積などがいる。(保坂芳男)

岩国英国語学所の卒業生の進路について、執念とも言える情熱で調べておられ、感心しました。残る卒業生について1名でも2名でも明らかにして頂ければと楽しみにしております。(Dragon)

徹底した調査によりステーベンスの経歴の欠所を埋めた点を高く評価したいと思います。(Emma)

メールを駆使されて、豊富な資料集めの技法に感心いたしました(特に老人でこの方面に弱い身にとって、高嶺の花であるだけに...)。数と質の両面を追

うのは大変だと思いますが、典型的な人物に集中して、当時の資料が、今失われる世代の所有になり、廃棄される危険のある、今がギリギリであるだけに、直接親族の方にアプローチして資料を確保し、時代背景(英語学習の要求、教育制度)の読みなどを加えて、代表選手をもって、すべてを語る手も考えられないでしょうか。ステーベンスの教育の解明の御大成を祈ります。(年おいて道遠き男)

情報収集を精力的になさっており、これから各人物・各項目の精査・深化が期待できると思います。

(もみじまんじゅう)

上杉論文(1998)をさらに深めた考究。岩国学校教育資料から、卒業生の進路をまるで細い糸を手繰るようにして、綿密に調べ上げたその努力、それに費やされた時間に敬意を表したい。(風呂 鞏)

最新の資料でまとめ、充分これまでの研究の成果があらわれていた。メールの威力を認識した。

(Duke Ace)

保坂先生のご研究は岩国語学所を総合的な立場から丁寧に長期にわたって追求されたものでした。次々と新しい資料が収集されており、特に、英国からの一次資料を収集している点は、これからの新しい英学史研究の方向を示すものと感心いたしました。私も学ぶべき方法論だと思いました。ご研究のますますのご発展を祈ります。

< 研究発表 >

村端五郎「Apple はリンゴ(林檎)に非ず 英和辞書における Apple 訳語の変遷について」



単に訳語史ということではなく、plum に次いで apple を取り上げての考察で、食、或いは農文化史の観点を織りこんでの分析に、なるほどと思うところがありました。次は何が出るのでしょうか。

(Dragon)

“apple”の訳語がどう変わったのか、なぜ変わったのかについて、名探偵の謎解きのように明解に解明

していただき、興味深かった。(Emma)

英学史の門外漢と自称されながら、若い大学生、高校生への刺激を与えられている、人文科学の見事な実物見本であり、大いに学ぶ点があった。実は牧野先生の資料館で、凄い本物の文化人であり、高邁な識見に胸をうたれた体験があっただけに、先生の熱心が心に伝わって来ました。牧野先生は私の私淑する学者です。テレビで、是非、教育番組でも、文化番組で御登場されて、是非、リングから始まる文化学を、人文学をしっかりと伝えてくださる事を祈っています。世は専門家の易しい言葉と熱い言葉に接するのが大事な時代だと思います。

(年おいて道遠き男)

地道な調査がなされたご研究で、安心して聴けるご発表でした。(もみじまんじゅう)

英和辞書における訳語の問題、その変遷、正確な訳語を求める人々の努力の経緯、辞書編纂者達の苦勞など、今回はappleという単語を軸に、興味あるストーリーを聞くよこびを感じた。(風呂 鞏)

先生が、appleの訳語は「林檎」でいいのかという問題提起をされるなかで、牧野富太郎の研究者としての姿勢を強く感じました。64もの辞書を調べられた一覧表からは、訳語の変遷がとても分かりやすく理解することができました。(保坂芳男)

Appleの訳語リングにもかくも色々な歴史があるとは、わかりきっていることと思っても調べてみると意外と面白く啓発された。逆輸入でリング(?)という時代がくるか。(Duke Ace)

村端先生のご発表では正に村端英学史独自の世界を展開されました。Appleの和訳語の変遷を1862年から2004年にわたり64種の辞書に当たりながら、克明に分析され、解釈を施されました。英学史のみならず、英語学・地理学・生物学等博く調べ上げる村端先生の方法は、他の追従を許さないものだと思います。

<全体の感想>

大変充実した発表で、実りあるものでした。色々とお世話頂き、心から感謝申し上げます。(風呂 鞏)

山口は寒いと思っていたがわりと過ごしやすく幸いであった。(Duke Ace)

今年の発表者の方々の幅、底の深さに大いに刺激を受け、この会の発展を祈ります。

(年おいて道遠き男)

英学史研究の醍醐味を味わい、さらに新しい息吹を感じる充実した例会でした。学会の裾野を広げべく、ともにがんばっていきましょう。

中国・四国支部ニューズ

平成19年度第2回役員会

2007年12月8日(土)、山口例会に先立ち、役員会を開催しました(出席者9名)。主な議題は、今年度の活動報告と、来年度の活動計画についてでした(以下の来年度計画をご参照ください)。

事務局の強化についても議論されました。今年度の総会で決定した会則変更にも則り、事務局に幹事を置くこととし、能登原祥之会員に委嘱することが決まりました。

また、故妹尾啓司先生のご遺族から御蔵書の一部を学会に託したいとのご希望が小篠理事を通して伝えられ、受け入れてくれる図書館を探し交渉することとなりました。候補として、県立広島大学庄原キャンパス図書館が挙がり、馬本事務局長が交渉に当たることになりました(以下の関連記事もご覧ください)。

来年度(平成20年度)行事計画

- ・支部総会 5月24日(土)
- ・研究例会 第1回 5月24日(土)
第2回 12月13日(土)
- ・研究紀要の発行 5月24日
- ・名簿の発行 5月24日
- ・ニューズレターの発行(4月・7月・10月・1月)
- ・役員会 第1回 5月24日(土)
第2回 12月13日(土)

来年度の第1回研究例会は広島地区、第2回研究例会は福山地区での開催を予定しています。

故妹尾啓司先生の御蔵書受け入れについて

故妹尾啓司先生(元支部長)の御蔵書の一部は、県立広島大学庄原キャンパス図書館での受け入れが決められました。以下の387冊が登録され、利用が可能となります。

図書

- 「キリシタン研究 第1集~34集」 34冊
- 「写真集 瀬戸内」 1冊
- 「別冊一枚の絵 画集瀬戸内」 1冊
- 「図説 福山・府中の歴史」 1冊

雑誌

- 「立命館文学」 16冊
- 「基督教研究」 32冊

「カトリック」 186冊
「カトリック研究」 20冊
「キリシタン文化研究会会報」 96冊

詳細は図書登録が完了次第、順次ニューズレターにてご紹介いたします。

県立広島大学図書館は一般の方のご利用も可能です。広島、三原、庄原の各キャンパスから、他のキャンパス所蔵の図書等の利用請求もできますので、どうぞご利用ください。

なお、このたび図書登録されなかった資料は、支部事務局にて保管しています。歴史、思想、戯曲、美術関係の全集もの、歴史や宗教関係の図書、和綴じ教科書類(国語関係) 同窓会雑誌等が含まれています。こちらでも会員の皆様にご利用していただけるよう整理を進め、順次ご紹介する予定です。

閲覧希望やお問い合わせは事務局(馬本研究室)までお願いいたします。

『英学史論叢』第11号原稿募集

中国・四国支部研究紀要『英学史論叢』第11号の刊行に向けて、会員の皆様のご投稿をお待ちしています。ニューズレター前号に記載の「執筆要領」「標準書式」に従い、研究論考・研究ノートは正副計3部、その他の原稿(英学史随想、英学史時評、書評等)は1部、事務局宛にお送りください。

原稿の提出締切は、平成20年2月20日(水)
(消印有効)です。

事務局より

寄贈本の紹介

能登原昭夫先生より、山陽学園大学・山陽学園短期大学社会サービスセンター(編)『日本の文化遺産・岡山の国際交流』(吉備人出版,2006)、および『日本の教育・岡山の女子教育』(同,2007)をご寄贈いただきました。先生が長年ご勤務なさった山陽学園大学で行なわれた2005、2006年の公開講座の記録・講演集です。これらはニューズレターNo.43で紹介した『日本の文化・岡山の文化』の続編です。

『日本の文化遺産』には、能登原先生による「岡山における日米交流の歴史」「言語」「文化」「交流」というご講演録が掲載されています。戦争体験に始まる、先生とアメリカとの交流史が、20ページわたって綴られています。

閲覧ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

会費の納入について

すでに多数の会員の皆様より平成19年度の会費(一般3,000円、学生2,000円)をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。年度末が近づいてまいりましたので、未納の方は下記口座までお振込みくださいますよう、よろしく申し上げます。

(口座番号)01360-9-43877

(加入者名称)日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター原稿募集

英学史にまつわる「エッセイ」「研究メモ」「読書ノート」などの原稿をお寄せください。いずれも400~800字程度。電子メールまたはワープロ印字原稿を事務局までお送りください。次号以降のニューズレターに掲載させていただきます。

皆様の研究情報をお寄せください

会員の皆様の英学史に関する新刊、発表論文、講演、研究発表、市民講座、雑誌記事などの情報をお寄せください。ニューズレターでの紹介とともに、今後の研究例会企画の参考にさせていただきます。

ニューズレター広告の募集

ニューズレター1ページ(A4)の4分の1サイズの広告を募集します。ご自身の著書等、英学史に関わる広告を奮ってお寄せください。広告料は4号分のニューズレター掲載で5,000円です。本ニューズレターは、毎号印刷版80部を発行しています。また、ウェブサイト上で広く世界に公開しています。

英学史全国ニュース

日本英学史学会報 No.114

年に3回発行されている学会報 No.114 が発行されました(1月1日)。中国・四国支部所属の先生方による記事は次の通りです。

小篠 敏明 史に聴けば

「現在完了形」の英学史研究 フェートン号
事件200周年記念大会に寄せて

佐 光 昭 二 <豊田賞を受賞して>

『阿波洋学史の研究』を上梓して

竹 中 龍 範 英学史手帖

東博通『北の街の英語教師 浜林生之助の生涯』

日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費5,000円)。問い合わせは事務局まで。

広島英学史の周辺(19)

山口例会翌日、県立図書館の明治維新資料室を訪ねました。一室に集められた明治維新資料の中に、英学史に関する文献がたくさん揃っており、しかも奥の閲覧スペースは畳敷きに文机。調べ物をしながら、しばし至福のときを過ごしました。この空間を頻りに利用できる人が羨ましいなあと、心から思います。11月に大学共通教育の授業「地域の理解」の一環として、「庄原英学校 130年 英学史から見た広島教育」という1コマだけの授業を行いました。寺田芳徳先生のご研究を通じて出会った庄原英学校については、この地に赴任してから少しずつ資料を集め、研究発表や講座の機会に何度かまとめてきましたが、学部生向けの授業で話すのは初めてです。授業後の感想では、「英学」について初めて聞いたという学生が大多数でした。興味をもった学校の歴史を調べる課題を出したのですが、出身校の歴史などをまとめた面白いレポートが届き始めています。少し前に、兵庫県の森さんという方から研究室にお電話がありました。森 琴石（もり きんせき、1843～1921、明治期の大阪で銅版画・南画の分野で活躍した画家）の曾孫にあたる森さんご夫妻は、琴石の作品に纏わる膨大な調査研究を「森琴石.com」というウェブサイトに発表し続けていらっしゃいます（<http://www.morikinseki.com/>）。その琴石が深く関わった出版人の一人に吉岡平助がいます。たまたま私が庄原ゆかりの森 修一による『ナショナルリーダー独案内』について書いた研究資料をウェブサイトで見つけ、その中に吉岡平助の名があったので、情報提供を求めてこられたのでした。近江屋吉岡賣文館館主・吉岡平助が森 修一の著作以外にも英語関係の書物の出版に多く関わっていること、寺田芳徳先生の『日本英学発達史の基礎研究』に庄原ゆかりの人として紹介されていること、『明治人名事典 II 上』（1988）（この原本は『日本現人名辞典』日本現人名事典発行所、1900）に、「大阪有名の書籍卸商なり其取引の盛なる関西地方に於て君の右に出る者なし」と記されていること、といったところが私の持つ情報です。そこで「こちらこそ是非教えてください」と今後の情報交換をお願いし、電話を切りました。またまたウェブサイトが結ぶ人の縁を感じたひとときでした。香川大学図書館では、10月28日～11月4日に神原文庫資料展「西洋語まなび事始め」が開催されました。毎年この時期に、神原文庫では所蔵の貴重書を展示する資料展が行われています。英学関係書もかなり収蔵されており、今回の資料展解説書『西洋語まなび事始め』では、オランダ語、英語、フランス語、ドイツ語、

ロシア語の語学書の紹介と解説が施されています。資料展の開催にあわせ、11月3日には竹中龍範先生のご講演「日本人はいかに英語を学んだか 幕末・明治初期のようす」が行われました（解説書、および竹中先生のご講演資料は、神原文庫のウェブサイトから入手可能です。

<http://www.lib.kagawa-u.ac.jp/www1/kambara/tenji2007/tenji207.html>

解説書で取り上げられた英学関係書は、慶応2（1866）年の『英吉利文典』（中浜万次郎が持ち帰った文法書 *The Elementary Catechisms, English Grammar* の翻刻。薄いので「木の葉文典」と呼ばれた）から、明治3（1870）年の『挿譯理學初歩』（英語読本として使用された *First Lessons on Natural Philosophy for Children* 『理學初歩』の虎の巻）まで50点余。巻末にはそれぞれの写真も掲載されています。この資料展冊子と、ご講演の音声を収録したCDを竹中先生にいただきました。フェートン号事件に遡る英学の歴史を、ユーモアを交え熱く語っていらっしゃいます。『挿譯英吉利文典』（「木の葉文典」の独案内）の解説では、各語に訳語を与え、数字をふってその語を並べかえる順序を示した「独案内」における読み方を取り上げられました。かつては原文（英語）の順に単語の訳を読むことを「直訳」、数字の順に日本語の語順で単語の訳を読むことを「意識」と呼んだことを口頭で紹介され、蒙を啓かれた私は、思わず「おお」と声を上げました。

前号この欄で紹介した東 博通『北の街の英語教師 浜林生之助の生涯』について、「高師在学中の成績表」が掲載されていると書きましたが、成績表は浜林が広島高師の前に学んだ「三重師範」のものでした。お詫びして訂正させていただきます。今年は「冬らしい」冬が続いています。庄原ではセンター入試の日にも降り続けました。「何も大寒に入試をしなくても」と、あるブログに書いたところ、翌朝の日経「春秋」にも入試時期の問題点が指摘されていました。春よ来い、早く来い。こたつで丸くなりながら願っています。（馬）

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.53

2008年2月2日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 竹中龍範）

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部